著作権保護コンテンツ

子どもは、みんなかわいいのです

2作の絵本発表後、十数年の間は鉛筆画でのモノクロームな世界の創作に没頭。
絵本創作の再開後には、生の喜びに満ちあふれた主人公たちの姿が、カラフルに描かれています。
お話に出てくる各絵本はP10～13で詳しく紹介しています。

「普段はお断りするのだけど、どうぞ好きなように撮ってください。ほんの描きかけでしかないのですけど」。油絵制作のコーナー。

――ご自身の、小さかったころの記憶からうかがえますか？

子どものころ、耳について離れなかったのは「おとなしい子だね～」っていう言葉。私のアルバムを見ていると、だいたい、口を三角形にぽかあっとあけて、なんにも見ていないような顔でぼおっとしてるのばっかり。

近所のおばさんたちが頭の上から「おとなしい子だね～」って、ごしょごしょ言ってるの。小さいときでも、ひそかに傷つくんだよね。その感じは、歓迎していることじゃないって、なんとなくわかるから。あんまり子どもに言っちゃいけない言葉だと思うんだけど。

――内向的、だったのでしょうか。

私は子どもができても、ずーっと、いまだに内向的ですから（笑）。うちの息子はどこでも入っていける子どもだったから、いつも一応見守っているふりして、後ろからついていってたの。

数年前、『やさいのおなか』の木内かつさんの『木内かつの絵本あそび』（ともに福音館書店）という本を送ってきてくれたんですけど、同封の手紙に「『おなかのすく さんぽ』は、子どもの人間関係の絵本です」と、いきなり書いてあった。当たりです。もっと言うと大人の人間関係の絵本でもあって、さらに言うと、私の人間関係の絵本なんです。

絵本の中にはいないけど、私が男の子のあとをくっついて歩いている。絵の中の見えないところでおびえきっているから、それがつい、描く手に移って、ちょっと怖いな――……、というふうに。

――絵本の男の子は息子さんだったのですね。片山さんとは対照的です。

『どんどん どんどん』も『おなかのすく さんぽ』も「コッコさん」シリーズのお兄ちゃんも、息子そっくりのつもりで描いたんですけどね。

息子は、『どんどん どんどん』を気に入っているみたい。これは、小さいときの息子そのままで、自分らしく蹴散らかしてどんどん進んでいきます。

最近になって『おなかのすく さんぽ』のことが「大嫌いだ」って言いだしたんです。詳しく言わないからよくわからなかったんですけど、動物が男の子をなめたりするところ、ありますでしょ。「オレが、ヤマネコに、頭からがぶっと食われているなんて……」父親は、何を考えているんだ、って。ヤマネコに食われてしまえ、とでも思っているのか、って（笑）。

――これは甘噛み、ですよね？

そう。甘噛みだけど、男の子はほかの場面より、少し緊張した顔をしているでしょ。たぶん2歳か3歳くらいだったけど、すぐにピンと来たらしくて。怖がっているのが、気に食わないみたいなんだ。

――「なんで絵本の中で、僕を怖がらせるんだ」、と。

うん。それ以後、まったくこれを見ていないらしい。ずーっと恨みに思っていたのかもしれないね。いちいちつまんない説明はしなかったけど、そんなことを思っていることがあったのかと。このことをしゃべると、1時間くらいかかります。

――ああ、すごく聞きたいです！が、次回のお楽しみにします。

「好きなものを漠然と」貼った壁。「写真の男の子がうちの子に似ているなあって。いい顔でね。子どもはみんなかわいいです」

著作権保護コンテンツ

この人にあれもこれも

こんにちは絵本作家さん！

スペシャル

『りんごかもしれない』
1,400円（ブロンズ新社）
初の絵本作品「発想えほん」シリーズ・第1弾。あらゆる角度からりんごを考察してみると……？　第6回 MOE 絵本屋さん大賞1位、第61回産経児童出版文化賞美術賞受賞作。

『りんごかもしれない』などでおなじみ！

ヨシタケ シンスケさん

打たれる杭は　飛び出せる

2013年に初の自作絵本を刊行以来、大ヒット作品を生み出し続けるヨシタケシンスケさん。今号は盛りだくさんの特別編！　連載中の「読みきかせ・おはなし会用語事典」、表紙＆描きおろし絵本とあわせてお楽しみください。

撮影／石川正勝　取材・文／菅原千賀子

僕の基本は、ネガティブです

僕は姉と2人の妹に挟まれた、4人きょうだいの長男という環境で育ちました。子どものころの日々の目標は、「とにかく、場を荒立てない」こと。それが僕の生きる道だったんです。

2歳上の姉は勉強ができて、絵を描けば入賞もする。何をやっても褒められるタイプで、おまけに口も立つ。いっぽうの僕は、甘えん坊の人見知り。もっと前に出なさいと言われても、端っこで目立たないようじっとしていたいタイプ。圧倒的に強い姉に、2人の妹が加担すれば、もう反論なんてできません！

3人の女性に挟まれ、自分の意見を持つ意味も利点も、まったく見当たらなかったわけです。思えば、自分のせいでまわりがピリピリすることに敏感な子どもでしたね。どうすれば情勢が沈静化するかを常に考えていて、もともと携えていたネガティブ気質とこの環境で、自分を持たずに生きることが自然と身についていったのかもしれません。

それが僕を苦しめたけれど、今では創作を助けてくれる要素にもなっているんです。女性の気を荒立てないという意味では、僕は現在、なかなかいい夫だと思うんですけどねぇ……。

『かみをきってよ』

ボサボサになってしまったぼくの髪。切ろうかな、どうしようかな？　そこで、「かみをきってよ、おとうさん」と頼みました。すると、「いいぞ、とくべつにきってやろう」とお父さん。お父さんがぼくの髪を切ってくれる、特別な時間が始まります。

作／長田真作
1,300円（岩崎書店）

『ことりのおそうしき』

公園で、死んだばかりの小鳥を見つけた子どもたちは、お葬式をしてあげることにしました。みんなでお墓をつくり、小鳥のために歌を歌い、泣き、花を飾りました。それは、いつしか小鳥のことを忘れてしまうまで続きました。

文／マーガレット・ワイズ・ブラウン
絵／クリスチャン・ロビンソン
訳／なかがわちひろ
1,400円（あすなろ書房）

もう読んだ？ 新刊100!!

2016年3～5月に発売された新刊絵本の中から、読みきかせにもおすすめの100冊を選びました。子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。

定期購読者限定プレゼント

新刊絵本プレゼントの応募はアンケート用紙、またはウェブから。

※出版社五十音順
マークは乳幼児から、
は中・高校生も楽しめる本です。

『こばとちゃんとあひるちゃん きょうはあめふり』

あひるちゃんの家にこばとちゃんが来ました。ふたりは家の中で遊んでいましたが、飽きてしまったので長靴と傘を持って雨の中、外に行きます。風に乗って飛んだり、傘の船に乗ったり、こばとちゃんのママが迎えに来るまでたくさん遊びました。

文／デイヴィッド・マーティン
絵／デイヴィッド・ウォーカー
訳／福本友美子
1,250円（岩崎書店）

『こんばんはあおこさん』

夜になって寝る時間がやってきました。部屋の明かりも消えたけれど、あおこさんは寝ようとしません。すると、コウモリが外へおいでと誘いに来ました。「こんばんは　あおこさん」。あちこちからささやく声が聞こえてきます。呼んでいるのはだあれ？

作／かわかみたかこ
1,400円（アリス館）

『ビーレットのやさいづくり』

ビーレットは、野菜づくりを始めることにしました。まずは、土を耕すことから。イヌのピフも手伝います。種をまき、芽が出たら雑草を取り、柵をつくり……やることはいっぱい、天気も心配です。やがて、たくさんの野菜を市場で並べることができました。

文／ウルリカ・ヴィドマーク
絵／イングリッド・ニイマン
訳／高橋麻里子
1,000円（岩波書店）

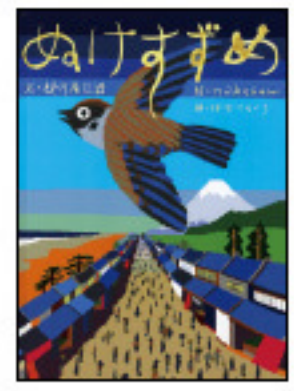
『ちょう』

みかんの葉っぱに見つけた、黄色い小さな卵。あれあれ、中から出てきたのはとげとげのある小さなイモムシでした、それはやがて、サナギから色鮮やかなチョウへと成長します。小さな生きものが育つ瞬間を、美しい切り絵で表現しています。

作／いまもりみつひこ
1,300円（アリス館）

『ぬけすずめ』

ここは小田原の宿、何日も宿賃を払わず泊まっているお客がいます。絵描きと名乗るそのお侍は、ついたてに5羽のスズメを描いて帰っていきました。ところが翌朝、そのスズメたちが絵から抜け出したので大騒ぎです。古典落語がもとになっています。



文／桃月庵白酒
絵／ nakaban
編／ばばけんいち
1,500円（あかね書房）

『ネコヅメのよる』

真夜中にネコは気配を感じました。もしかしてそろそろなのかもしれません。あっちからもこっちからも集まってきたネコたちはささやきあいます。「ついにこの日がきましたね」。そうです、月がネコのツメのように見える、めったにない夜が来たのです。

作／町田尚子
1,400円（WAVE出版）

『よつごのこりす ふうちゃんのぼうけん』

怖がりのふうちゃんが、はじめてひとりで巣から外へ出てしまいました。カエルに出会ってびっくりしたり、お友だちの家に行く途中で木の枝にはさまってしまったり、はじめての冒険はドキドキがいっぱい。さがし絵も載っています。

作／西村 豊
1,400円（アリス館）

『みつけてくれる？』

今日はお母さんが赤ちゃんと一緒に病院から帰ってくる日。でも私、まだお姉ちゃんじゃないもん。私は、ネコのクロに赤ちゃんの話をたくさんしながらクロと葉っぱの船に乗って、小さなトンネルを抜けて隠れました。早く見つけてくれるといいな。

作／松田奈那子
1,400円
（あかね書房）